

# 琉球大学学術リポジトリ

## Factors Associated with Outcomes of Percutaneous Transluminal Renal Angioplasty in Patients with Renal Artery Stenosis : A Retrospective Analysis of 50 Consecutive Cases

メタデータ	言語: en 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 又吉, 哲太郎, またよし, てつたろう メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38765">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38765</a>

(別紙様式第3号)

## 論 文 要 旨

### 論 文 題 目

Factors Associated with Outcomes of Percutaneous Transluminal Renal Angioplasty in Patients with Renal Artery Stenosis: a Retrospective Analysis of 50 Consecutive Cases

(腎動脈狭窄症に対する経皮経管的腎動脈形成術の効果に影響を与える因子:後ろ向き  
の連続50症例の検討)

氏名 又右哲太郎 

背景：腎動脈狭窄症に対する経皮的腎動脈形成術（PTRA）と保存的治療の有効性を比較した最近の2つの大規模臨床試験で、PTRAの優位性が示されなかったことから、世界的に腎動脈狭窄症に対するPTRAの実施は躊躇されるようになった。一方で、両試験は、担当医がPTRAにより有効性が得られる可能性が高いと判断した症例は除外されており、適応選択に資する情報は乏しい。我々は日本人の腎動脈狭窄症へのPTRAの適応判断の参考となる情報を得るため、PTRAの有効性に関係する因子の検討を行った。

方法：2001年～2005年に国立循環器病センターで初回のPTRAを実施した、血行動態上有意と考えられる腎動脈狭窄症の連続50症例を後ろ向きに観察した。主たる評価項目はPTRA後の血圧改善（平均血圧で5 mmHg以上の降圧または服用降圧薬の減量の複合）、PTRAから1年後の血清クレアチニン値から推定した糸球体濾過量（eGFR

R) の変動とした。PTRAの有効性に寄与する因子としてPTRA前の年齢、性別、体格指数、耐糖能異常の有無、脂質異常症の有無、両側腎動脈狭窄の有無、血管抵抗係数(RI)、血漿レニン活性、平均血圧、eGFRおよび造影剤使用量(腎機能予後のみ)を想定し、これらと血圧改善ならびにeGFRの変動との相関を検討した。

結果：症例の原疾患別の内訳は動脈硬化性42例、線維筋性異形成6例、高安動脈炎2例であり、平均年齢は61.5歳であった。PTRA前の血圧152.3/80.3mmHgはPTRA後に132.6/73.2mmHgと統計学的有意に低下し、降圧は1年後も維持された。服用降圧薬数も平均1.98剤からPTRA後に1.28剤と統計学的有意に減少したが、1年後には1.95剤と前値に戻った。血圧改善が73%の症例に認められた。血清クレアチニン値から推定した糸球体濾過量(eGFR)はPTRAの前後で

統計学的に有意な変動は見られなかった。血圧改善を予測しうる因子はなかった。PTRA前のRI高値と耐糖能異常の存在は腎機能の予後不良と相関していた。耐糖能異常の存在はRI高値と相関していることが知られており、本研究でも同様の相関が認められたことから、多変量解析ではRIと、年齢、性別、BMIおよび造影剤使用量を加えたモデルで補正を行った。補正後もRI高値と腎機能の予後不良との間で統計学的に有意な相関を認めた。病型分類別では線維筋性異形成と高安動脈炎は症例数が少なく評価困難であったが、動脈硬化性の腎動脈狭窄症に限定した解析では全体と同一の結果が得られた。

結論：血行動態上有意な腎動脈狭窄症に対して、PTRAは血圧を低下させた一方で腎機能の改善は得られなかった。血圧改善を予測しうる因子はなかった。PTRA前のRI高値は腎機能の予後不良を予測する因子であった。(1, 173文字)